

書評

# 『和田周三全歌集』について

水野 洋

和田繁二郎（歌人名和田周三）先生は昭和二十一年立命館大学予科教授となられてから、近代文学の研究において多くの重要な成果を上げてこられたことについてはいまさら多言は要すまい。その先生が逝去されて四年、この度歌人和田周三の作品を集大成した『和田周三全歌集』（短歌新聞社 平一五・七刊）が刊行された。

卷末年譜によると和田周三が作歌活動に関わりをもった初めは昭和七年（一九歳）のこと、最初の勤め先であった京都市役所の職員之歌会「平安短歌会」への入会である。その一ヶ月後の昭和八年一月には「ポトナム短歌会」に入会、以後小泉芝三に師事し、白川静、国崎望久太郎といった歌友にも恵まれ、平成十一年六月に亡くなるまで六六年間の長きにわたって「ポトナム短歌会」を中心に作歌活動を続けてきた。本書は第一歌集『微粒』（昭三一・七）から、『雪眼』（昭三九・三）『環象』（昭四八・一〇）『揺曳』（昭五六・八）『暁闇』（昭六一・一〇）『往還』（平二・五）『春雷』（平五・九）『越冬』（平八・七）まで、生前に刊行された八つの歌集総数三二四二首と合同歌集『白珠』（昭一〇・一二）

『ポトナム歌文集』（昭一六・一二）『貫流』（昭五七・九）『群嶺』（平五・六）に掲載された歌や歌集未収録歌を合わせ五三三首と和田周三とともにポトナムの運営を担ってきた大西公哉による「和田周三歌集解題」、上田博の「和田周三 略年譜」、安森敏隆「和田周三の人と文学」、國末泰平「和田繁二郎・周三 研究書解題」など和田繁二郎・和田周三に直接教えをうけてきた学匠たちによる研究解説を収め、文字通りの全歌集として歌人和田周三の全貌を呈示するものとなった。

私が和田繁二郎先生の授業を受けたのは今から二十年ほど前の学部の子生の頃で、その時分先生はすでに立命館大学を退官されておられた。その時私は高名な歌人であるとはうかつにも一向存じ上げてはいなかった。当初の私にとって、和田先生は落ち着いた優しい声で講義される、穏やかな物腰の大学の先生であった。その後、私が近代の詩歌の研究を自分のテーマに据えたとき、ほとんどポトナムの代表歌人和田周三とあの和田繁二郎先生が同一人物であったと知った次第である。その時、歌人和田周三の真摯

な歌いぶりと大学教授和田繁二郎の篤実な姿に相通じるものを感じることができた自分をうれしく思った。

先生の歌は象徴主義的な手法を用いておられ、これについて、自身「師、小泉三提唱の『現実的新抒情主義』の精粹である『現実感象徴』の実践」(「越冬」「あとがき」)であると述べておられる。

集団の中に居らしむる我が個を

さぐりて陽のしばらくは落ちぬ

しんしんと夜を雨降れり何程か

身をめぐるもの洗はれぬべき

第一歌集『微粒』の冒頭の二首をあげてみた。師小泉三先生の骨太な歌い振りに比べるとより細かく神経を働かせた繊細な感覚が際立っており、昭和・平成の短歌史には「現実的新抒情主義」の発展形態の一つと位置づけることが可能だろう。晩年は「淡泊になったことと、ある種の軽みが増した」(「往還」「あとがき」)とご自分で分析されているように、難解さが薄れた平明で円熟した歌境をしめされた。短歌の初心者にはこちらのほうが親しみやすいかもしれない。

「立命館大学短歌会」「京都歌人協会」など伝統ある京都歌壇の発展に尽力し、昭和、平成の短歌史を彩る歌人の業績が今こうしてまとめられたことは、誠に喜ばしいことであり、歌壇にとつての貴重な財産となるであろう。

(短歌新聞社

二〇〇三年七月

四九七頁

本体価格九〇〇〇円)

(みずの・ひろし 本学非常勤講師)